

## 留学・研究計画書

氏名	田中 有紀	留学機関名	中国藝術研究院音楽研究所
留学先国名	中華人民共和国	留学期間	西暦 2008 年 9 月 ~ 2010 年 8 月
研究テーマ	「中国音楽史」の再検討（宋代以降の雅楽、士大夫楽論の思想的分析を通して）		
研究テーマの説明	（テーマの学術的・社会的意義についても記載してください）		
<p>本研究は近代中国及び日本で始まった「中国音楽史」研究を再検討し、西洋の枠組みから距離を置いた新しい「中国音楽史」を描くことを目的とする。そして中国において「音にまつわる文化」がどのように語られ、政治や社会あるいは文化の中に受容されたかを検討することで、東アジアに固有の音と人との関係の新たな側面について考察を深めることが大きな目的である。具体的には、宋代以降膨大に登場する音楽理論書や史書の禮樂志・音楽志・律曆志など利用し、政治を担う士大夫層の雅楽（主に国家祭祀や朝会に用いられる音楽）に関する言説を分析する。</p> <p>テーマの学術的意義を説明するために、現在の中国音楽研究に存在する問題を指摘したい。近代以降始まった「中国音楽史」研究に共通するのは、西洋由来の「藝術」「科学」といった概念に、中国の「音にまつわる文化」をあてはめようとした点である。こういった傾向は、先駆的な役割を果たした四つの「中国音楽史」（蕭友梅（1884-1940）、田邊尚雄（1883-1984）、王光祈（1892-1936）、楊蔭瀏（1899-1983））を分析した時に明らかである。彼らの「音楽史」では「藝術」にも「科学」にも分類できないものを否定的に論じるしかなく、特に宋代以降の雅楽については無視される場合もある。しかし、近代的「中国音楽史」研究が西洋音楽の流入に触発されて始まったことを考えれば、こうした傾向を単純には批判できない。問題は、これらの「中国音楽史」が現在でも依然として力を持っていることである。「藝術」的に優れているか、「科学」的に意味があるかという視点で、中国音楽の価値の有無が決められてきたが、西洋由来の概念で説明できない所にこそ中国独自の世界があるのではないか。</p> <p>修士論文で、「藝術的」とされる宋代戯曲音楽や「科学的」とされる蔡元定（1135-1198）の音律論にあえて焦点をあてず、従来「空論」として扱われ、まともな専門研究の存在しない北宋期士大夫による楽論（特に北宋末の陳暘『樂書』と大晟樂）をとりあげたのはそのためである。政治を担う士大夫が、音律や楽器について禮学と並行して積極的に論じ、すでに機能している民間音楽と折り合いをつけながら禮樂思想を融合させ、国家制度の中に組み込もうとした過程は「中国音楽史」を語る上で無視することはできない。そして、理想的な音楽を表す概念である「古樂」を掲げ、それがいかなるものであるかという問題は、音律論の面では体系化がなされたあとも、様々にかたちを変えて延々と近代まで論じられ続けるのである。私はそういった態度こそが、西洋音楽史にはない「音にまつわる文化」に対する中国的な態度であり、この態度を分析することで従来のような停滞音楽史観、衰退音楽史観を見直す契機につながると考える。西洋という束縛から解放された、中国あるいは東アジアの独自のあり方を音楽の側面から考えることは、これからの東アジア社会にとって意義のあることと言える。</p>			

# 成果報告書

記入日 2010年 8月 18日

氏名 田中有紀	留学先国名 中華人民共和国	所属機関 北京大学哲学系
研究テーマ：「中国音楽史」の再検討（宋代以降の雅楽、士大夫楽論の思想的分析を通して）		
留学期間： 2008年 9月 ～ 2010年 8月		
<p>【研究の成果】私はこれまで儒学における楽の思想を、特に宋代・明代を中心に研究してきた。楽、すなわち音楽は古くは六芸の一つであり、また楽に関する著作は伝統的な図書分類において経部に分類される。経学の一分野ではあるが、他経と異なる点は、楽経というものが明確に存在しないことである。しかし、だからこそ歴代の儒者たちは柔軟に思想を展開し、その結果多彩な議論を生むに至った。また、礼楽と称されるように、楽は礼を補完する役目を担うが、そればかりでなく、詩学や天文暦算など様々な学術分野と関連する。つまり楽を通して、伝統中国の様々な思想的営みを見ることができ、また現存する史料の豊富さからも、これまでの中国思想研究を十分補い得るものである。また、宋代以降を研究対象とした理由は、これまで主に音楽学の領域でこの分野が扱われてきたことに関連する。先駆的な役割を果たした四つの中国音楽史研究では、宋代以降の雅楽について、南宋の蔡元定（1135-1198）『律呂新書』や明の朱載堉（1536-1610）『楽律全書』など少数を除き、否定的な評価を下すばかりでなく、無視する場合すらある。その理由は、宋代以降多くの楽論が政治思想と密接に関わるようになり、また宋学と結び付き思弁性を増し、楽律理論が複雑化するあまり実際の演奏に応用されず、音楽学や科学史の枠組ではうまく評価できないからである。初期の中国音楽史研究は近代西洋音楽の流入に触発されて始まったため、「芸術的であるか」、「科学的であるか」が評価と直接結びつく傾向はやむを得ないが、問題なのはこれらの研究が現在でも影響力を持っていることである。そこで私は、楽の問題を中国思想として捉えなおし、宋代や明代の士大夫や儒者が、自らの理想とする雅楽を儒学思想の中にどう位置づけ、経学的根拠を与えたかという問題に注目した。研究方法としては、四庫全書などで経部楽類として分類される著作や、史書の礼楽志・音楽志・律曆志を用い、主に士大夫の雅楽（国家祭祀や朝会の場で使用する音楽）に関する言説を分析し、大きく分けて三つのテーマに沿って研究を進めてきた。（1）宋代・明代の雅楽に関する言説を儒学思想の文脈から見直すことで、従来の停滞音楽史観から解放された、新しい音楽史を構築すると同時に、これまでの中国思想史研究を補完することである。これは本研究の最も中心的なテーマである。（2）宋明同様、否定的評価の強い清代楽論を再分析し、その宋明雅楽観を検討するほか、新しい儒学思潮の中で楽の位置づけがどう変遷していったかを理解する。（3）近代中国の音楽史家たちの多くは伝統音楽に関しても深い造詣があるが、中国近代音楽史はこれまで専ら西洋音楽受容の観点から研究されてきた。本研究では、伝統中国の雅楽思想に関する分析を生かし、中国近代音楽史の新たな側面を描くことも目的とした。</p>		

(1)に関しては二つの研究成果がある。一つは、北宋楽論に関する研究である。北宋末期の士大夫陳暘(1068—1128)『楽書』による、祭祀における楽器配置に関する経学的議論を分析し、以下のように結論付けた。第一に、楽律論が中心であった仁宗期と比べ、神宗期では楽器論が注目され、『周礼』に見える八音という概念に基づき、特定の楽器ばかりを重んじるのではなく、様々な楽器をひとしなみに扱うべきという主張が展開された。第二に、このような八音思想に基づき、王安石学派である陳祥道・陳暘兄弟は『礼書』・『楽書』の中で、どのような楽器配置が経書と一致するかを考察し、祭祀を主宰する人物の身分の差だけではなく、祭祀自体のランクに応じて差等化された楽器配置法を細かく構想した。第三に、北宋の士大夫たちは、従来楽律学が中心であった楽論を楽器論という新しい分野に拡大し、礼学と並行して積極的に論じ、国家制度に組み込んだ。この研究に関しては、「儒家經典与雅楽—以北宋陳暘的《楽書》为中心」(儒家文化与青年精神国際學術研討会、重慶・重慶信息技術職業学院、2009年10月)として中国語で口頭発表を行い論文集に論文が掲載された。

もう一つは、明代後期の朱載堉に関する研究である。朱載堉は平均律の発明で知られ、明後期の実学思潮を代表する人物として高く評価されてきた。彼の楽律思想の基礎である累黍の法や、平均律算出の際に九進法と十進法による演算を併記したことについて、従来の研究では、朱載堉の「科学的」な側面を強調したいがため文脈を疎かにし、「朱載堉は科学的根拠のない累黍の法を軽視した」、「二種の演算の併記は無意味であり平均律理論と矛盾する」と決めつけていた。私は朱載堉の『律学新説』と『律呂精義』を分析し、以下のように結論づけた。第一に、「同律度量衡」(『尚書』)の思想を重視し、「律」と「度」は表裏一体であると主張する朱載堉にとって、累黍の法は重要であり、黍を重ねるという具体的な「度」によって黄鐘律管を作成することで、「律」と「度」の同時性を強調することができる。第二に、古の文献には「黄鐘九寸」や「黄鐘十寸」等諸説あるが、累黍はこのような不統一な記述を説明するのに有効である。朱載堉は「黄鐘九寸」が黍の縦幅を基本単位として九進法を用いた場合の長さ、「黄鐘十寸」が黍の横幅を基本単位として十進法を用いた場合の長さであるとし、同じ長さを示すものと説明した。この研究については、「明代朱載堉之黄鐘論“同律度量衡”—累黍之法与九進位制、十進位制的并存」(全球視野中的中国科学史国際學術研討会、上海・上海交通大学科学史与科学哲学系、2009年11月)として中国語で口頭発表を行い、その論文集に中国語論文が掲載された。また朱載堉の出身地である河南省沁陽にて調査を行った。

(2)に関しては、清代中葉の凌廷堪(1757—1809)の燕楽研究を分析した。凌廷堪は「以礼代理」の思想で知られると同時に、雅楽研究の有効性に疑問を持ち、燕楽研究を始めた先駆者とされる。私は、彼の礼研究の具体的成果である燕楽研究に着目し、『礼経釈例』『燕楽考原』などを分析して、以下のように結論した。第一に、凌廷堪は唐宋燕楽の起源を龜茲由来の琵琶と断定することで、彼が研究対象として選んだ唐宋燕楽は、古の聖人制作の楽とは断絶する。そのため、彼が経世致用の礼学研究として燕楽を選んだ理由は曖昧なままである。第二に、凌廷堪の「以礼代理」の主張によって、崇礼傾向が高まり清代儒学史に転換をもたらしたとする研究もあるが、燕楽研究などの典章制度研究自体が、礼学の一分野としてすでに認められ、礼の重要性が十分認識されていたからこそ、凌廷堪は唐宋燕楽と古代音楽の関係を説明せずにいられたのではないか。第三に、凌廷堪は理を完全には否定しない。彼は宋学的心性論と理を切り離すが、宇宙的・普遍的規律としての理は、凌廷堪の学術思想にとって依然として重要である。凌廷堪はこういった理の概念を用い、西学と中国伝統学術、そして龜茲由来の燕楽と古の聖人制作の雅楽を、名は異なるが同じ理を持ち通じるものと考えた。第四に、凌廷堪の燕楽研究は、陳澧などがすでに批判をしており、その後雅楽研究の重要性も見直されている。しかし、少なくとも凌廷堪が、蔡元定や朱載堉のような雅楽の楽律研究の価値を完全に否定し、燕楽へと焦点を移し

たことは、清代楽論を考える上で重要な問題である。この研究については「凌廷堪之經学与燕楽研究——“理”帶來的“礼”的共存」、(東西哲学伝統中的「共生哲学」建構之嘗試国際学術研討会、台北・台湾大学哲学系、2009年3月)として中国語で口頭発表し、その論文集に中国語論文が掲載された。

(3)については、近代中国で盛んに論じられた「国楽」の問題を、民国期の思想家、王光祈(1892-1936)の中国音楽史研究を取り上げて考察し、さらに現代中国の儒学復興運動との関係を考察した。王光祈は現在、「中華民族精神」を追求した「愛国主義思想家・音楽研究家」として高く評価されている。私は、王光祈の著作『東西楽制の研究』や『中国音楽史』などの楽律史研究を分析し、王光祈の中国音楽史は、西方との交流で始まり、その後も交渉を続け、外来文化を取り込みながら発展してきた歴史であると位置付けた。つまり彼にとって、伝統的な中国音楽自体が西との交流によって生まれたものである以上、国楽も当然、西洋音楽との交流を必要とする。これについては「近代中国における国楽と伝統音楽—王光祈と比較音楽学」として日本語の論文がブックレットに掲載された。これらの研究に際し、北京大学図書館や中国国家図書館を利用したほか、北京大学での友人たちとの日々の議論や国際学会における討論には大きく啓発された。

【これからの目標(博士論文にむけて)】今後は留学中の成果をふまえ、「明代雅楽思想の研究—朱載堉を中心に」という課題で研究を進める。現在までの研究を通し、朱載堉を除いて雅楽思想を論じることはできず、また、彼を通して雅楽思想の様々な側面を理解できると確信するからである。朱載堉は北宋楽論を批判したが、これほど綿密に北宋楽論を考証した人物は他にない。また、清代凌廷堪にとって朱載堉は中心的な批判対象であり、燕楽研究に取り組んだ主要な原因と言ってもいい。近代以降は平均律理論が欧州で高く評価され、王光祈など中国音楽史家にとっては中国音楽の優位を示す誇りであった。それゆえ朱載堉研究は数多く存在するが、私の見るところ、すべて同じ問題を抱えている。先行研究では雅楽の歴史が楽律理論発展史として描かれ、その発展過程に外れるものは否定されることが多い。だが、儒学における楽が楽律だけを意味するとは限らない。確かに楽律は中心的存在であるが、だからといって楽律発展史として楽の思想を描いた場合、多くのものを見失う。また、楽に関する議論を幅広い視野で捉えることで、楽律理論の背後にある思想もより明確に理解できる。朱載堉についても同じである。多くの先行研究が「平均律の発明者としての朱載堉」を描き、朱載堉の他の学術を考察する際も、平均律の発明者にふさわしい先進的な思想がどこに見いだせるかという観点から分析し、こういった観念にそぐわない思想は否定的に評価する。またこれまで平均律に関わる箇所ばかりが部分的に解説されたため、朱載堉と宋学の関係という基礎的な問題にすら正反対の結論が出されていた。実践と実験を重視し、朱子学に果敢に反対した実学思潮の学者とする場合もあれば、彼の楽律論の基本思想は宋学につらなるとする研究もある。前者は偏った宋学理解に基づいた見解であるが、後者の見解も疑問である。例えば朱載堉が九進法と十進法を併記したことは、河図洛書に由来し朱熹の思想にもつながる。しかし、朱載堉は、朱熹の認めた蔡元定の理論(三分損益法)を明確に否定する。つまり、蔡元定の楽律学が朱熹の学術に吸収され、朱子学の一部となったならば、朱載堉は体系化された朱子学から必要な理論を抽出し、律暦合一など様々な思想を加え、結果的には朱熹の楽律論とは異なる体系に属す理論を作った。律暦合一は漢代律暦思想につらなる。朱載堉は、暦学に関する著作『律暦融通』では『漢書』律暦志を重要な理論的支柱としているが、平均律を説いた『律学新説』中では劉歆を批判する。これをふまえれば、楽律学だけでなく朱載堉の学術全体に気を配る必要があるのは明白である。今後はこのような点に注意しながら研究を進めてゆきたい。

## 【留学全般についての感想】

私が留学を開始した2008年の夏は北京オリンピックの興奮がまだ冷めやらぬ時期でした。街中には大学生のボランティアが溢れ、所属先の北京大学はパラリンピックの卓球会場となり、活気に満ちた環境に心が躍りました。しかし留学を始めたばかりの私にとって困難も少なくはなく、まず部屋探しに苦労しました。予想した通りではありますが、北京大学の留学生宿舎と交渉した時には話すら聞いてもらえず（留学生が過剰気味であるため、宿舎側としても態度が強硬です）、その日のうちに不動産会社に行き、大家さんと家賃を交渉して部屋を決めましたが、北京ではアパート契約でトラブルが絶えないという噂を聞いていたため、また最初に家賃をいくらかまとめて先払いし結果としてかなり高額になるため、正直不安でたまりませんでした。また私はあまり外向的な性格でもなく当時は語学力もそれほどではなかったため、この時ほど辛かったことはなかったと思います。そんな自分が、留学を終えた今、「もう一度北京に帰りたい」と思い、中国を想うとすでに懐かしい思いすら沸き起こってくるのは、この二年間に会った多くの友人のおかげです。また、友人や学会で出会った若手研究者を通して、多くのことを学び、自分の研究への態度にも大きな変革が生じ、刺激的な留学生活を送ることができたからだと思います。

留学中は三度にわたり国際学会（台北・重慶・上海）へ参加し、特に同年代の学生と交流する機会をたくさん持ちました。その中で、私の研究する楽という領域が、哲学でも科学でも音楽でもなく、既存のどの領域にも属さないことに気付かされました。そして現在の、特に中国大陸における研究は、こういった領域に関する区分がとても明確で、私は自分の研究を説明する際大いに苦労する反面、研究内容が相手に伝わった時に、新鮮な驚きと興味を持って接してもらえることに気がつきました。儒学の思想的営みは、例えば朱子学を例にとってみても、決して理や気をめぐる「哲学的」な思惟ばかりではなく、現在の学問領域では科学や音楽として独立している様々な学術の総体が、中国哲学の真の姿なのではないだろうかと考え、自らの目指すべき方向を自覚するに至りました。

また、私は普段、哲学系で中国哲学を専攻する学生たちと接することが多かったのですが、彼らは中国哲学を国学として誇りに思い、その誇りが私にとって時に眩しく、またこれまで中国の外で中国哲学を勉強してきた私にとって素直になじめない部分も多くあり、彼らにとってもまた、私は異質な存在であったのだろうと思います。しかし、読書会や研究会に毎週欠かさず参加し、毎月のように発表をしたことで、徐々にお互いの壁がなくなってゆき、それぞれの長所を素直に吸収できるような関係を築くことができたと同時に、語学力の向上にも役に立ちました。そして文献を読む際の態度の差、それによって生じる日中の研究の違いを理解し、日本の研究者の欠点を自覚すると同時に、何が強みであるのかも身をもって理解できました。こういった経験は、長い留学期間の中で少しずつ得られた相互信頼を基礎とし、国際会議に参加するだけでは得られない、学生であるこの時期ならではの貴重な体験であり、将来の自分にとって大きな糧となるだろうと思います。私が研究者として独り立ちし、中国での友人たちもそれぞれ自分の研究を確立したあと、お互いの国を行き来し、学術的ネットワークを作っていくことは私の夢でもありますが、この二年間を通してその基礎づくりを十分に行えたと確信しています。留学する前は、そのような夢が夢でしかなかったけれど、今はそれが具体化してきたことで、将来どのような研究者になりたいかというイメージが、がらりと変化しました。それゆえ、この留学は私の研究人生にとっても欠かすことのできない経験となりました。最後になりましたが、私にこのような機会を与えてくださり、また留学期間中もメールを通じて励ましてくださった財団の方々、長い間ご支援くださり本当にありがとうございました。